

「主体的・対話的で
深い学び」の
実現に向けた授業実践
学習指導案例と指導のポイント

vol.4 器楽編

+発展例(鑑賞)

移行期の指導に当たって

新学習指導要領で押さえないポイント 4

新学習指導要領の全部又は一部を実施できる 4

学習評価は現行の観点で進める 5

「主体的・対話的で深い学び」の
実現に向けた授業実践
器楽編

「器楽」に関する音楽科改訂の趣旨及び要点 6

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践 7

学習指導案例 と 指導のポイント

1. 題材名 8

2. 学習指導要領の指導事項 8

3. 題材の目標 8

4. 教材について 8

5. 題材の評価規準 10

6. 指導と評価の計画(全2時間) 10

ワークシート例 18

本題材における発展例(鑑賞) 19

「移行期用資料」発行予定

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践
学習指導案例と指導のポイント

- vol.1 我が国の伝統的な歌唱編
- vol.2 鑑賞編
- vol.3 創作編
- vol.4 器楽編(本書)
- vol.5 歌唱編

vol.1～4は既刊, vol.5は令和元年度中に発行予定

移行期の指導に当たって

新学習指導要領で押さえないポイント

平成29年に告示された新学習指導要領において、音楽科の目標は次のように示された。

- 表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- (1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
 - (2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。
 - (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。

音楽科で育成を目指す資質・能力が「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と規定され、そうした資質・能力の育成を目指すために「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿った目標が示された。それによって、生徒が教科としての音楽を学ぶ意味が一層明確になった。学年の目標についても、教科の目標の構造に合わせて、三つの柱で整理された。

また、内容構成については従来と同様に、「A 表現」「B 鑑賞」及び「共通事項」で構成された。指導する内容自体について大きな変更はなかったものの、「思考力、判断力、表現力等」「知識」「技能」のそれぞれの資質・能力に対応するように構成され、それによって、指導すべき内容が一層明確になっている。移行期においては、これらの点をきちんと踏まえながら、自らの授業について振り返り、指導の改善を図っていく必要がある。

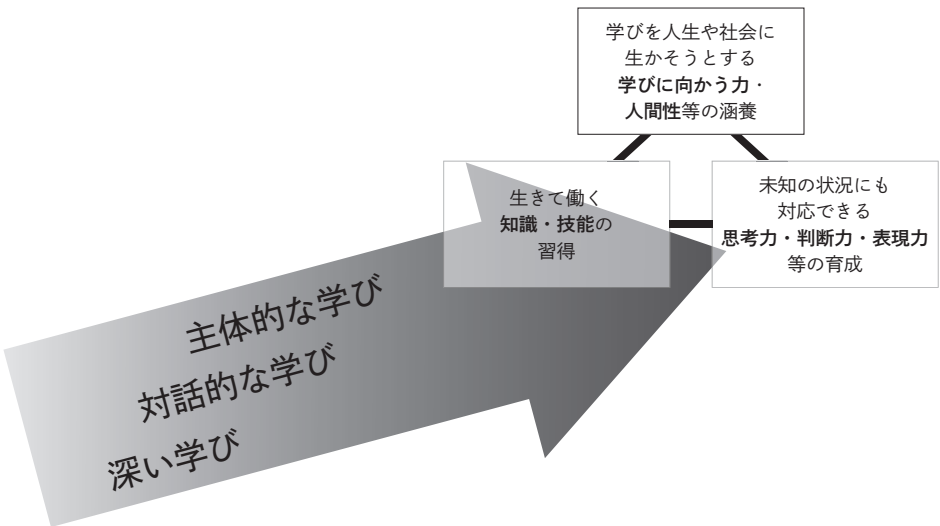
新学習指導要領の全部又は一部を実施できる

中学校においては平成30年度～令和2年度が移行期に当たり、音楽科の指導に当たっては、

現行中学校学習指導要領第2章第5節の規定にかかわらず、その全部又は一部について新中学校学習指導要領第2章第5節の規定によることができる。
(文部科学省告示第九十四号)

としている。

新学習指導要領の基本方針や趣旨を踏まえた授業改善を計画的、段階的に進めながら、授業の内容を考えていくことが重要である。特に音楽科においては、指導する内容については現行学習指導要領からの変更がほぼなく、学年度の学習すべき内容に支障を来さないため、容易に移行することが可能であるといえる。現行の教科書を使いながら「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組むようにしたい。



学習評価は現行の観点で進める

移行期における学習評価については、新学習指導要領の内容で指導しても、現行の評価規準の観点をを用いることに留意する必要がある。ただし、新学習指導要領が全面実施される令和3年度からは「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価する方向で検討が進んでいる。その点も視野に入れておくことが大切である。

「主体的・対話的で深い学び」の
実現に向けた授業実践
器楽編

「器楽」に関する音楽科改訂の趣旨及び要点

平成29年告示の新学習指導要領では、資質・能力の育成を目指すための三つの柱に沿って、教科の目標や指導内容が示されている。ここでは中学校音楽科の器楽に関する指導内容を取り上げ、若干の説明を加える。

「A 表現」(第 1 学年)

(2) 器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、器楽表現^{※1}を創意工夫すること。

イ 次の(ア)及び(イ)について理解すること。

(ア) 曲想と音楽の構造との関わり

(イ) 楽器の音色や響きと奏法との関わり

ウ 次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。

(ア) 創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法, 身体の使い方などの技能

(イ) 創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説「音楽編」(以下「解説」)p.43

※1…第2,3学年では「曲にふさわしい器楽表現」

※2…第2,3学年では「音楽の構造や曲の背景」

アは、「思考力、判断力、表現力等」に関わる事項である。「器楽表現に関わる知識や技能」とは、事項イ(知識)及び事項ウ(技能)に示すものを指している。「得たり生かしたりしながら」とは、新しい知識や技能を習得したり、既習の知識や技能を生かしたりという意味である。「器楽表現を創意工夫する」とは、表したい器楽表現について考え、どのように器楽表現するかについて思いや意図をもつことである。生徒が様々な器楽表現を試しながら工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつ過程を大切にしたい指導が求められている。

イは、「知識」に関する事項である。(ア)で求めている理解とは、その音楽固有の雰囲気や表情、味わいなどが、どのような音楽の構造によって生み出されているのかを捉えることである。〔共通事項〕を手掛かりに、生徒が曲想を感じ取り、感じ取った理由を音楽の構造の視点から自分自身で捉えていく過程が大切である。(イ)で求めている理解とは、楽器には、その楽器固有の音色や響きがあり、そのことが奏法と密接に関わっていることを捉えることである。〔共通事項〕を手

掛かりに、生徒が、楽器の音色や響きが生み出す特質や雰囲気を感じ、感受したことで奏法との関わりを自分自身で捉えていく過程が大切である。

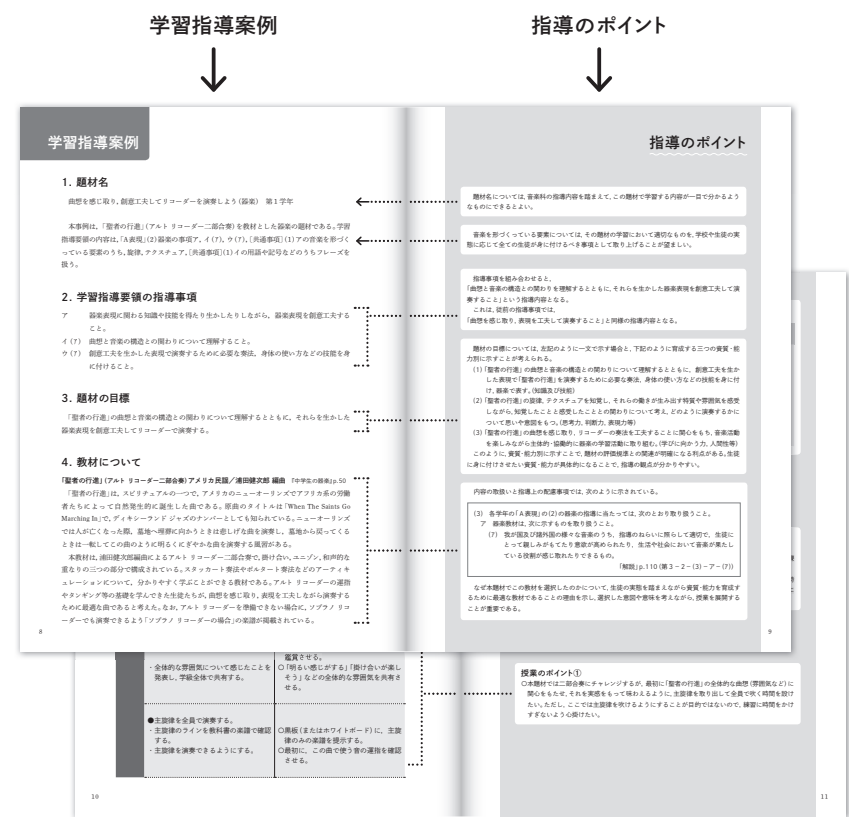
ウは、「技能」に関する事項である。(ア)(イ)とも、「創意工夫を生かし」とし、技能が思いや意図を表すために必要なものとなるよう指導することを求めている。生徒が必要を実感しながら、(ア)では奏法、身体の使い方などの技能を、(イ)では全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能を身に付けられるようにすることが求められている。

このように器楽の指導内容は、ア、イ、ウの三つに分けて示されているが、それぞれに指導するのではなく、第3「指導計画の作成と内容の取扱い」1(2)に示されているように、ア、イ及びウの各事項を関連させて題材を設定することになる。すなわち、器楽の学習は、ア、イの(ア)(イ)のいずれか又は両方、ウの(ア)(イ)のいずれか又は両方の各事項を組み合わせた題材の設定となる。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践

音楽科の学習においては、心と身体を使って音楽を感じ取る体験や、他者との関わりを通して音楽のよさや価値を実感する活動が重視されている。そして、これらの学習指導を充実させるためには、「アクティブ・ラーニング」の趣旨を盛り込んだ「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち、学習活動と学びとの関連性や、学習活動を通して何が身に付いたかという観点で授業改善をすることが重要になる。

次のページからは、左(偶数)ページに「学習指導案例」を、右(奇数)ページには「指導のポイント」として、「授業のポイント」や「主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点」などを示す。



1. 題材名

曲想を感じ取り、創意工夫してリコーダーを演奏しよう（器楽） 第1学年

本事例は、「聖者の行進」（アルト リコーダー二部合奏）を教材とした器楽の題材である。学習指導要領の内容は、「A表現」（2）器楽の事項ア、イ（ア）、ウ（ア）、〔共通事項〕（1）アの音楽を形づくっている要素のうち、旋律、テクスチャ、〔共通事項〕（1）イの用語や記号などのうちフレーズを扱う。

2. 学習指導要領の指導事項

- ア 器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、器楽表現を創意工夫すること。
- イ（ア） 曲想と音楽の構造との関わりについて理解すること。
- ウ（ア） 創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法、身体の使い方などの技能を身に付けること。

3. 題材の目標

「聖者の行進」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、それらを生かした器楽表現を創意工夫してリコーダーで演奏する。

4. 教材について

「聖者の行進」（アルト リコーダー二部合奏）アメリカ民謡／浦田健次郎 編曲 『中学生の器楽』p.50

「聖者の行進」は、スピリチュアルの一つで、アメリカのニューオーリンズでアフリカ系の労働者たちによって自然発生的に誕生した曲である。原曲のタイトルは「When The Saints Go Marching In」で、ディキシランド ジャズのナンバーとしても知られている。ニューオーリンズでは人が亡くなった際、墓地へ埋葬に向かうときは悲しげな曲を演奏し、墓地から戻ってくるときは一転してこの曲のように明るくにぎやかな曲を演奏する風習がある。

本教材は、浦田健次郎編曲によるアルト リコーダー二部合奏で、掛け合い、ユニゾン、和声的な重なりの三つの部分で構成されている。スタッカート奏法やポルタート奏法などのアーティキュレーションについて、分かりやすく学ぶことができる教材である。アルト リコーダーの運指やタンギング等の基礎を学んできた生徒たちが、曲想を感じ取り、表現を工夫しながら演奏するために最適な曲であると考えた。なお、アルト リコーダーを準備できない場合に、ソプラノ リコーダーでも演奏できるよう「ソプラノ リコーダーの場合」の楽譜が掲載されている。

題材名については、音楽科の指導内容を踏まえて、この題材で学習する内容が一目で分かるようなものにできるとよい。

音楽を形づくっている要素については、その題材の学習において適切なものを、学校や生徒の実態に応じて全ての生徒が身に付けるべき事項として取り上げることが望ましい。

指導事項を組み合わせると、
「曲想と音楽の構造との関わりを理解するとともに、それらを生かした器楽表現を創意工夫して演奏すること」という指導内容となる。
これは、従前の指導事項では、
「曲想を感じ取り、表現を工夫して演奏すること」と同様の指導内容となる。

題材の目標については、左記のように一文で示す場合と、下記のように育成する三つの資質・能力別に示すことが考えられる。

- （1）「聖者の行進」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、創意工夫を生かした表現で「聖者の行進」を演奏するために必要な奏法、身体の使い方などの技能を身に付け、器楽で表す。（知識及び技能）
- （2）「聖者の行進」の旋律、テクスチャを知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように演奏するかについて思いや意図をもつ。（思考力、判断力、表現力等）
- （3）「聖者の行進」の曲想を感じ取り、リコーダーの奏法を工夫することに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組む。（学びに向かう力、人間性等）

このように、資質・能力別に示すことで、題材の評価規準との関連が明確になる利点がある。生徒に身に付けさせたい資質・能力が具体的にすることで、指導の観点が分かりやすい。

内容の取扱いと指導上の配慮事項では、次のように示されている。

（3） 各学年の「A表現」の（2）の器楽の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。
ア 器楽教材は、次に示すものを取り扱うこと。
（ア） 我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに照らして適切で、生徒にとって親しみがもてたり意欲が高められたり、生活や社会において音楽が果たしている役割が感じ取れたりできるもの。
「解説」p.110（第3－2－（3）－ア－（ア））

なぜ本題材でこの教材を選択したのかについて、生徒の実態を踏まえながら資質・能力を育成するために最適な教材であることの理由を示し、選択した意図や意味を考えながら、授業を展開することが重要である。

5. 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
題材の評価規準	「聖者の行進」の曲想に関心をもち、音楽表現を工夫して演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。	「聖者の行進」の旋律、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、曲想を味わって音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	「聖者の行進」の曲想を生かした音楽表現をするために必要な奏法などの技能を身に付けて演奏している。

中学校の学習指導要領が全面实施される令和3年度からは、以下の3観点で評価する。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
題材の評価規準	①「聖者の行進」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解している。(知識) ②創意工夫を生かした表現で「聖者の行進」を演奏するために必要な奏法、身体の使い方などの技能を身に付け、器楽で表している。(技能)	「聖者の行進」の旋律、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	「聖者の行進」の曲想を感じ取り、リコーダーの奏法を工夫することに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組もうとしている。

6. 指導と評価の計画(全2時間)

※評価規準は省略
※評価方法は右(奇数)ページに◎で示す

時	◆ねらい ●学習内容 ・学習活動	○指導上の留意点
1	◆「聖者の行進」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解する。	
	●本題材の見通しをもつ。 ・これまでのアルト リコーダーの学習について振り返る。 ・本題材では、アルト リコーダーで「聖者の行進」(二部合奏)にチャレンジすることを伝える。	○運指やタンギングなど、これまでに学んできたことを確認させる。 ○4人グループで音楽表現を追究していくことを伝える。
	●「聖者の行進」の指導用CDを聴き、曲想に関心をもち。 ・指導用CDを聴く。 ・全体的な雰囲気について感じたことを発表し、学級全体で共有する。	○教科書の楽譜を見せずに指導用CDを鑑賞させる。 ○「明るい感じがする」「掛け合いが楽しそう」などの全体的な雰囲気を共有させる。
	●主旋律を全員で演奏する。 ・主旋律のラインを教科書の楽譜で確認する。 ・主旋律を演奏できるようにする。	○黒板(またはホワイトボード)に、主旋律のみの楽譜を提示する。 ○最初に、この曲で使う音の運指を確認させる。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【主体的な学びを実現する視点】

- 「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心をもち、生徒自ら学習活動を見通し、振り返り、課題を解決していこうとする学びのことである。
- 題材の最初に本題材と前題材との関連や学年間の系統的な接続を具体的に示したり、1単位時間の授業における目標や目指すべき姿を具体的に示したりしながら、生徒が何ができるようになるればよいか(何を身に付ければよいか)を明確にすることが大切である。

授業のポイント①

- 本題材では二部合奏にチャレンジするが、最初に「聖者の行進」の全体的な曲想(雰囲気など)に関心をもち、それを実感をもって味わえるように、主旋律を取り出して全員で吹く時間を設けたい。ただし、ここでは主旋律を吹けるようにすることが目的ではないので、練習に時間をかけすぎないよう心掛けたい。

- 楽譜を見ながら「聖者の行進」の指導用CDを聴き、音楽の構造をつかむ。
- ・教科書の楽譜(二部合奏)を見ながら指導用CDを聴く。
- ・旋律やテクスチャなどの音楽の構造に注目し、指導用CDを聴いて気付いたことや感じ取ったことをワークシート①に記入する。
- ・ワークシート①に記入したことを発表し、音楽の構造について学級全体で共有する。

- 楽譜を見ることにより、音楽の構造に目を向けさせる。
- 音楽を形づくっている要素のうち、旋律とテクスチャに注目することを伝える。
- テクスチャの視点から、「掛け合い」「ユニゾン」「和声的な重なり」の三つの部分があることを確認する。なお、これらの用語の意味を理解させる。

- 指導用CDのリコーダーの奏法に注目しながら「聖者の行進」を聴き、奏法を使い分けていることに気付く。
- ・リコーダーの奏法に注目しながら指導用CDを聴く。
- ・指導用CDを聴いて気付いたことを発表し、リコーダーの奏法を使い分けていることについて学級全体で共有する。

- はずむような感じで演奏している部分と滑らかに演奏している部分があることを確認させる。
- 旋律のフレーズに目を向けさせ、奏法との関わりについて意識させる。

- アーティキュレーションについて学び、奏法によって雰囲気が変わることを実感する。
- ・スタッカート奏法とポルタート奏法を用いていることを確認する。
- ・「聖者の行進」の最初の部分をスタッカート奏法とポルタート奏法で演奏し、奏法によって曲の雰囲気が変わることを実感する。

- 教科書の「アーティキュレーション」のページを用いながら、ここでは「スタッカート奏法」と「ポルタート奏法」が使われていることを確認させる。なお、これらの用語の意味を理解させる。
- 最初の部分を用いて、奏法の違いを教師が範奏する。
- 二つの奏法の違いを出すために、タンギングを工夫するなどのポイントを確認させる。

授業のポイント②

- 二部合奏の楽譜を見ながら、指導用CDを聴かせ、音楽の構造をつかませる。「気付いたこと(音楽の構造)」と「感じ取ったこと」について、ワークシート①に整理しながら記入させる。
- 黒板(またはホワイトボード)に拡大楽譜を用意し、テクスチャの視点から、「掛け合い」「ユニゾン」「和声的な重なり」の三つの部分があることを視覚的に分かるよう説明する。その際、これらを教師の側から先に示すのではなく、生徒たちの気付き(発表)からつなげて説明できるように配慮したい。なお、「掛け合い」「ユニゾン」「和声的な重なり」の三つの用語の意味を理解させる。

※ワークシート例→p.18

授業のポイント③

- 指導用CDを繰り返し聴くことになるが、ここではリコーダーの奏法の違いに注目させる。できればあまり時間をかけすぎずに、はずむような感じで演奏している部分と滑らかに演奏している部分があることを確認させ、次の活動(授業のポイント④)へとつなげる。

授業のポイント④

- 教科書の「アーティキュレーション」のページ(既習)を用いて、指導用CDの演奏では、どの奏法が用いられていたかを問い、「スタッカート奏法」と「ポルタート奏法」が用いられていることを確認させる。なお、「アーティキュレーション」「スタッカート奏法」「ポルタート奏法」という用語の意味を理解させる。
- 最初の部分を用いて、奏法の違いを教師が範奏する(下の「教師の発問・指導例、生徒の発言例」参照)。
- 「スタッカート奏法」と「ポルタート奏法」という用語の意味を押さえるだけではなく、生徒が自ら演奏することで実感を伴って理解させることが大切である。
- 新しい評価の3観点で考えると、この活動場面で、「知識」の観点を評価することができる。主には、観察で見取る。

教師の発問・指導例、生徒の発言例



最初にスタッカート奏法で演奏するよ。
〈※演奏する〉どんな感じがしたかな？

はずんでいる感じがしました。



スタッカート奏法はタンギングで音を短く切って演奏するよ。
次にポルタート奏法で演奏するよ。
〈※演奏する〉どんな感じがしたかな？

滑らかな感じがしました。さっきよりも一つ一つの音が長い感じがしました。



そう。ポルタート奏法は息の流れを切らずに演奏するよ。奏法によって曲の雰囲気が変わるね。それでは、みんなもやってみよう。

- ◆「聖者の行進」の旋律、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように演奏するかについて思いや意図をもつ。
- ◆創意工夫を生かした表現で「聖者の行進」を演奏するために必要な奏法、身体の使用方などの技能を身に付け、器楽で表す。
- ◆「聖者の行進」の曲想を感じ取り、リコーダーの奏法を工夫することに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組む。

- アーティキュレーションについて復習する。
- ・前時に学んだアーティキュレーションについて振り返る。

○スタッカート奏法とポルタート奏法について確認させる。

- グループ(4人)で「聖者の行進」の音楽表現を創意工夫する。
- ・4人グループをつくる。
- ・「聖者の行進」に関わる情報を集める。(例)
 - ▶「聖者の行進」の曲の背景について知る。
 - ▶「聖者の行進」のいろいろな演奏を聴く。
 - ▶リコーダーの奏法について調べる。
- ・グループでどのような思いや意図をもって演奏したいかについて話し合い、ワークシート②に記入する。
- ・思いや意図を実現するためには、奏法をどのように工夫するかについて話し合い、ワークシート②に記入する。
- ・グループ内で二つのパートに分かれて練習する。
- ・グループ内で二つのパートを合わせ、奏法を工夫しながら演奏する。

○タブレット端末を用いて、Web上の情報サイトや動画サイトを利用してよいことを伝える。

○旋律やテクスチャ、フレーズなどの音楽の構造にも留意するよう促す。

○前時のアーティキュレーションの工夫について想起させる。

○互いに教え合えるよう声を掛ける。

○自分たちの思いや意図が演奏の音楽表現に結び付いているか、タブレット端末に録画するなどして確認させる。

授業のポイント⑤

- この活動は、本題材における「主体的・対話的で深い学び」の中心となる場面である。4人グループで「聖者の行進」をどのように演奏したいかについて思いや意図をもち、それを実現するために奏法を工夫する活動を行わせる。
- 「聖者の行進」に関わる情報を集める場面では、タブレット端末を用いて主体的に調べることができるようにするなどICT環境を整えておく(下の「グループ活動での生徒の発言例」参照)。
- グループで思いや意図を考える場面では、それを実現するために音楽表現をどのように創意工夫していくかについて、ワークシート②に整理しながら記述させるようにする。
- グループ活動では、調べたり考えたり、ワークシートに書き込んだりすることに時間をかけすぎず、実際にリコーダーを演奏しながら表現を工夫する活動も大切にできるような声を掛ける。
- ◎新しい評価の3観点で考えると、この活動場面で、「思考・判断・表現」の観点を評価することができる。主には、ワークシートの記述内容や観察で見取る。

グループ活動での生徒の発言例



僕は、この曲の歴史について知りたいので、タブレットで調べてみるよ。



僕は、リコーダーの奏法に関わることについてもっと調べたいな。



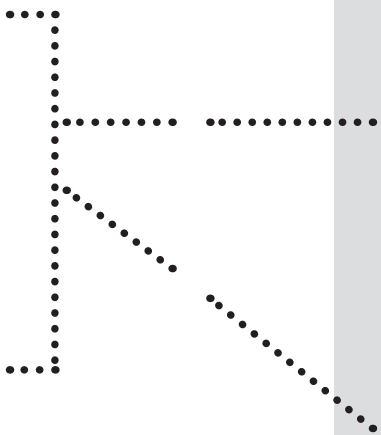
私たちは、いろいろな演奏を聴きたいので動画サイトで探してみるね。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【対話的な学びを実現する視点】

- 「対話的な学び」とは、学習活動を通して他者と協働することによって、多様な見方・考え方を学ぶことである。客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考え方をもちたり、音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていくことが重要である。
- 4人グループで「聖者の行進」についての情報を集める場面では、それぞれの生徒がタブレット端末などを用いて関心のあることについて調べ、それらの結果を互いに共有し、グループで「聖者の行進」をどのように演奏したいかについての思いや意図を協働で深めていく。これらの過程が対話的な学びである。

●グループでの追究の成果を発表し合う。 ・グループごとに「聖者の行進」を演奏し、追究の成果を発表する。 ・各グループの音楽表現のよさについてワークシート③に記入する。 ・ワークシート③に記入したことを発表し、各グループの音楽表現のよさについて学級全体で共有する。	○演奏の前に、どのような思いや意図をもって演奏したいかについて口頭で発表させる。 ○自分たちのグループで追究したこととは違った視点に注目するよう促す。
●本題材の学習を振り返る。 ・題材を通して学んだことをワークシート④に記入する。	○本題材を通して学んだことを振り返り、次の器楽の題材へとつなげる視点について含めながらワークシートに記入するよう促す。



授業のポイント⑥

○グループで演奏発表する前に、どのように演奏したいかについての思いや意図を口頭で発表させ、他の生徒はそれが音楽表現のどのようなところに表れているかに注目して鑑賞するよう促す。

○ワークシート③には、各グループの音楽表現のよさについて記入させるが、特に、自分たちのグループで追究したこととは違った視点に注目させる。

◎新しい評価の3観点で考えると、この活動場面で、「技能」の観点を評価することができる。主には、演奏表現の場面で見取る（観察）。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【深い学びを実現する視点】

○「深い学び」とは、「音楽的な見方・考え方」を働かせて自分自身の課題を見つけ、思いや考えを基に豊かに意味や価値を創造していくことである。「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」である。

○グループの発表を鑑賞する場面では、それぞれのグループの演奏を感性を働かせながら聴き、演奏のよさを知覚・感受することにより、自分たちのグループで追究したこととは違った視点からの学びを深め、「聖者の行進」の創意工夫に関わる学びをさらに更新していくことができる。

授業のポイント⑦

◎新しい評価の3観点で考えると、この活動場面で、「主体的に学習に取り組む態度」の観点を評価することができる。主には、ワークシートで見取る。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【主体的な学びを実現する視点】

○本題材で学んできたことを振り返り、グループでの活動や、各グループで追究したことを発表し合う活動を通して、生徒自身が学びの成長を自覚できるように導くことが大切である。また、次の器楽の題材に向けての新たな課題や願いをもてるとよい。

※ワークシート例(斜体の文字は、生徒の記述を例示している。)

「聖者の行進」の表現を工夫して演奏しよう

①「聖者の行進」の楽譜を見ながらアルト リコーダーの演奏を聴き、旋律やテクスチャなどの音楽の構造について、気付いたことや感じ取ったことを書こう。

気付いたこと（音楽の構造）	感じ取ったこと
・最初は掛け合いで始まる。	・気分がはずむような感じがする。
・二つのパートの両方が主旋律を演奏しているところもある。	・同じ旋律を演奏しているので力強さを感じる。
・ところどころハーモニーになっている。	・ハーモニーになると広がっているような感じがする。

②「聖者の行進」をグループで演奏するときに、どのような思いや意図をもって演奏したいか、またそのためにはどのように表現するとよいかを考えよう。

全体的な雰囲気	明るく陽気な感じで演奏したい。でも、亡くなったかたを見送るときに演奏する曲でもあるので、滑らかに演奏するところも入れたい。	
どこの部分を	どのような感じで（思いや意図）	そのためには（奏法）
・最初の掛け合い。	・明るくはずむ感じで演奏したい。ジャズのような雰囲気も出したい。	・スタッカート奏法を使う。
・ユニゾンやハーモニーのところ。	・滑らかな感じになるようにしたい。	・ポルタート奏法を使う。

③ 各グループの発表を聴いて、音楽表現のよさについて学んだことを書こう。

④「聖者の行進」の学習のまとめをしよう。

○ここでは、二部合奏の楽譜をしっかりと見ながら指導用CDを聴かせることが大切である。音楽を形づくっている要素のうち、旋律やテクスチャなどの音楽の構造に注目して、気付いたことや感じ取ったことを記入するよう促す。

教師の発問・指導例



今から模範演奏を聴くよ。二つのパートの関わりや動きがどのように変化していくか、教科書の楽譜を見て、しっかりと確認しよう。

音楽を形づくっている要素のうち、旋律とテクスチャの変化に注目すると分かりやすいよ。

旋律やテクスチャなどの音楽の構造の変化について、気付いたことや感じ取ったことをワークシート①に書き入れよう。



〈本題材における発展例〉

本題材では、時数を拡大して鑑賞の学習活動を取り入れることも考えられる。教師が用意した「聖者の行進」のジャズによる演奏を聴いたり、詳細な曲の情報について知ったりすることで、よりいっそう曲想や曲の背景について理解を深めることができる。このことが、器楽表現を創意工夫するために思いや意図をもつ場面につながるよう指導できるとよい。

○「全体的な雰囲気」については、グループで情報を集めて話し合った結果を基に、曲全体の雰囲気について記入するよう促す。

○「どこの部分を」「どのような感じで（思いや意図）」「そのためには（奏法）」については、楽譜のどこの部分を指すのか確認した上で、それぞれの部分に対する思いや意図をグループで考え、それを演奏で表現するためにはどのような奏法を用いるのがよいか、実際にリコーダーを吹いて試しながら工夫した結果を記入するよう促す。

○ここでは、全てのグループの発表について記入している時間はないので、自分たちのグループで追究したこととは違った視点で音楽表現を工夫していたグループの発表について記入するよう促す。

○ここでは、題材全体を通して学んできたことを振り返らせる。リコーダーの奏法を工夫することに関心を持ち、グループで音楽表現を追究する活動や、各グループの発表を聴き合う活動を楽しみながら主体的・協働的に学習に取り組むことができたかについて記入するよう促す。その際、次の器楽の題材へとつなげる視点について含めながらまとめるように助言する。

本社	〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-15 TEL:03-3957-1175 FAX:03-3957-1174 (代表)
中部支社	〒460-0024 名古屋市中区正木4-8-7 れんが橋ビル8F TEL:052-678-3151 FAX:052-678-3153
関西支社	〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1-14-17-601 TEL:06-6943-7245 FAX:06-6920-2170
西部支社	〒751-0808 下関市一の宮本町2-7-14 TEL:083-256-4747 FAX:083-256-1010